

日本地質学会第123年学術大会（桜上水大会）における国際交流活動報告

井龍康文（東北大学）

本稿では、日本地質学会第123年学術大会（桜上水大会）における国際交流活動を報告する。

桜上水大会には、大韓地質学会より、Min HUH会長（全南大学校）とYul ROH国際交流担当理事（全南大学校）が参加された。日本地質学会と大韓地質学会は、2007年以来、互いに隔年で学術大会を表敬訪問しており（ただし、昨年の訪問はなし）、今年は大韓地質学会一行を招待する年であった。Huh会長は9月10日に来日され、11日に離日という多忙なスケジュールであった。まず、一行は懇親会に臨席され、冒頭の挨拶をいただいた。Huh会長は2024年の万国地質学会の韓国開催（開催地は釜山；IGC2024, http://www.igc2024korea.org/2015/english/main/index_en.asp）が決まったことを紹介され、日本地質学会を始めとする地球科学コミュニティの協力を要請された。すでに政府から巨額の開催資金が得られており、特に若手研究者の旅費支援には、相当な額を支出するとのことであった。Huh会長のスケジュールを勘案し、懇親会後に一行の滞在先であるホテルグレイスリー新宿で日韓地質学会の意見交換の時間をもった。会議は、終始、友好的な雰囲気の中で進行した。会議の主要な話題は、IGC2024に向けての日本地質学会と大韓地質学会の協力に関してであった。韓国の万国地質学会招致に際しては、大韓地質学会の要請に応じて、日本地質学会から日本国内で実施可能な巡検案として、10コースを示しており、この催行に向けて準備することで合意した。また、IGC2024におけるシンポジウム等のシーズの開拓が急務であり、そのために、今後、両学会の学術大会で国際シンポジウム・ワークショップを開催し、日韓の研究者の交流を深めるとともに、共同研究の推進を図ることが重要であるとの認識を共有した。また、大韓地質学会は2017年に75周年を、日本地質学会は2018年に125周年を迎えるので、記念式典やシンポジウムには、相互に代表団を送ることが合意された。

学術大会中日（9月11日）には、海外からの参加者を半日巡検に招待した。参加者は、Roberto Compagnoni教授（トリノ大学；2016年度日本地質学会国際賞受賞）、Roh理事、Sunwoo DON博士（韓国地質資源研究院；国際シンポジウムにて招待講演）夫妻、地質学会からはSimon Wallis理事（名古屋大学）、橋辺菊枝氏（事務局）、井龍の7名が参加した。まず、新宿駅に集合したが、地下鉄に乗車するまで、かなりの距離を歩くことになり、参加者一同、新宿駅が巨大な迷宮であることを実感した。最初の訪問先は、浜離宮恩賜庭園であった。御存知のよう

に、この庭園は、江戸時代には徳川将軍家の別邸として整備され、戦前までは宮内省の管轄する離宮であった由緒ある庭園である。海外では、汐留の高層ビル群と伝統的な庭園とのコントラストが見所としてガイドブックやテレビで紹介されているとのことである。一同で日本庭園の美を満喫した後、“中島の御茶屋”を訪れ、茶道の心得のある橋辺に倣って、抹茶と和菓子を楽しんだ。庭園鑑賞を早々に切り上げ（海外からの参加者は名残惜しそうで、誠に申し訳なかった）、水上バスで浅草まで移動した。浅草は日曜日であったこともあり、大変な混雑であった。浅草寺近くの蕎麦屋で、早めの昼食をとった後、浅草寺雷門で解散となった。当日は曇り時々雨という、あいにくの天気であったが、見学中は雨に降られることはなく（幸いにも、降雨は移動中であった！）、半日巡検を予定通りに終えることができた。

桜上水大会では、「Geological and paleogeographical evolution of the Ryukyu Islands in the late Cenozoic」という国際シンポジウムが開催された。本シンポジウムは、日本地質学会と学術交流協定を締結している大韓地質学会および台湾地質学会との共同企画として行われ、シンポジウムの冒頭には、Roh理事から開会の挨拶をいただいた。大韓地質学会の海外からの招待講演者は、台湾および韓国から1名ずつの2名であった。琉球列島の地質学的研究は100年以上に渡る歴史があり、その結果に基づいて構造発達史が編まれてきた。一方、生物の分子系統に基づいて、個体群の隔離のタイミング（＝鳥々の分離のタイミング）が推定され、生物地理の変遷が描かれてきた。しかしながら、本来は一致すべき、地質学的観点に基づく構造発達史と分子系統に基づく生物地理の変遷には、大きな不一致がある。本シンポジウムの目的は、琉球列島の地質および生物地理に関する最新のデータを持ち寄り、新たな地質構造発達史を描き出すための学際的国際共同研究を行う第一歩を踏み出すことであった。今回の国際シンポジウムは、日本地質学会が学術交流協定を締結している学会との関係を生かして、多くの貴重な情報を入手できた点、生物地理分野との学際的交流を行うことができた点で、非常に有益なイベントと総括される。

このように、桜上水大会での学術大会では、大韓地質学会との交流行事を行い、大韓地質学会および台湾地質学会との共同企画として国際シンポジウムを開催することができた。今後、国際交流をさらに活性化し、日本地質学会の国際的なプレゼンスを高めていきたい。



写真左）半日巡検参加者。左から、橋辺菊枝（学会事務局）、Sunwoo DON（韓国地質資源研究院）夫妻、Roberto Compagnoni（トリノ大）、Yul ROH（全南大学校）、Simon Wallis（名大）の各氏。

写真右）国際シンポジウム参加者。左から、戸田 守

（琉球大）、太田英利（兵庫県立大・兵庫県立人と自然の博物館）、Sunwoo DON（韓国地質資源研究院）、Shu-Kun HSU（台湾 国立中央大）、荒井晃作（産総研）、中村 剛（北大）の各氏。